

# 倉橋の歴史（近代編）

※倉橋町史（平成13年刊行）参考

<目次>

1	町村制下の倉橋島村
2	産業の発達
3	近代教育
4	戦争と暮らし

## 1 町村制下の倉橋島村

### （1）市制町村制のスタート

- ・明治22（1889）年，市制町村制施行により，倉橋島村は戸数2,302戸，人口12,589人で始まった。同年4月村会議員選挙が実施され二級当選者12名，一級当選者12名が決まった。
- ・戸数，人口とも大きな村であったため，翌年にかけて，村の下に15の区が設置された。

### （2）教育

- ・明治27（1894）年，倉橋（本浦），尾立，室尾に尋常小学校を設立し，須川，西宇土，大向，重生，宇和木，釣土田，長谷，鹿島，宮ノ口に倉橋尋常小学校の分教場を，また海越，鹿老渡に室尾尋常小学校の分教場を設置した。
- ・小学校設置当時の就学率は，40％程度であったが，明治30年代には70％，40年代に入ると90％を超えた。しかし広島県全体と比べると，5％ほどの開きがあり，授業料を納められないとか，家業の手伝いなどの理由により，このような結果になっているようである。

### （3）財政

- ・明治22（1889）年，歳入1700円で始まった村の財政は，明治35（1902）年1万円を超え，明治41（1908）年2万円を超えた。
- ・歳出は，役場費（今の事務費か）と教育費で，全歳出の75％ほどになっており，他の町村では多い土木費は極端に少ない。
- ・土木費が少ないのは，土木事業が行われていなかったのではなく，その一部分を村費で賄い，大部分を各区の予算や寄付によって賄っていたことによる。

- ・歳入の「財産収入」は、各預金の利子や、貸地料など他の町村と共通するものの外、石材売却代金が含まれることが大きな特質であった。

## 2 産業の発達

### (1) 農業

- ・明治終期の統計では、倉橋島村は農地全体のうち、畑が70%弱で、平坦な土地に水田を営む内陸部と異なり、「耕して天に至る」の如く段々畑の畑作が農業の主流であった。
- ・農家の戸数など内訳は、全2442戸のうち、兼業小作1320戸（54%）、兼業自作530戸（21%）、専業小作240戸（10%）、専業自作352戸（15%）であり、農業だけで生活できる農家は少なかった。（明治41（1908）年）

### (2) 柑橘類

- ・倉橋島を始め、瀬戸内海沿岸の島嶼部では、平地が少なく水田などの造成が困難であった。このため畑作が中心であったが、気温が高く土壌も花崗岩で、柑橘栽培に適していたため、明治時代初期から、栽培が始まった。
- ・明治37（1904）年頃、水谷森太郎が、数本の紀州蜜柑を植えたのが倉橋島の蜜柑栽培の始まりとされる。明治40年代に入り、他の農家も作付けをし、営利的な栽培を始めた。
- ・大正から昭和にかけて増殖され昭和11（1936）年には、面積75町生産高25万貫、出荷組合も統一し、尾立、室尾に選果場を建設した。

### (3) 造船業

- ・明治に入って（特に明治30年代以降）、急激に新造、修理数が減少し造船業が衰退の一途をたどった。
- ・小型貨物船として物資輸送に力を発揮した「機帆船」は、明治末期から安価な焼玉エンジンなどを木造帆船に取り付ける形で普及していった。しかし、倉橋島の造船業者はこの動きに遅れた。
- ・太平洋戦争では、政府が海上輸送力強化のため「計画造船」に着手し活気が出ている。

### (4) 海運業

- ・瀬戸内海地方では、江戸時代から、米や薪などの生活必需物資を輸送する番船（小型の帆船）が存在し、倉橋島でも従事していた。
- ・明治末期、機帆船が登場し、倉橋島でも大正から昭和にかけて建造された。倉橋の機帆船は、「倉橋船」として八幡製鉄所の鋼材を阪神地区へ輸送するのに重用された。

### (5) 石材業

- ・倉橋島は、全島ほとんどが花崗岩で良質の石材を産出している。産業としての石材業の始まりは、明治に入ってからであり、特に、明治19（1886）年、呉に海軍の鎮守府の設置が決定し、海軍工廠など、関連施設の建設が始まると、需要が急速に増大した。
- ・明治から大正時代の倉橋島の石材の用途は、電車の敷石や埋め立ての捨て石が中心であった。建築用に使用されるのは大正以後である。
- ・明治末から国会議事堂建築の石材調査が行われ、2階以上の外装は、倉橋島産花崗岩（尾立石）と定まった。決定後、大正11（1922）年、「呉石材合資会社」が設立され、一手に引き受けた。
- ・国会議事堂建築以降、倉橋島の石は、建築用では、横浜裁判所、宮崎県庁、高松宮御殿、阪神ビルなどに使用され、電車用では、東京・横浜・大阪・京都、神戸など主要都市の市電、また阪神電鉄、西日本鉄道などの私鉄にも使用された。

## 3 近代教育

### (1) 明治期の学校教育

- ・明治5（1872）年、学制の公布に基づき、西連寺において倉橋小学校が開校した。その後明治9（1876）年まで10校が開校になった。
- ・明治12（1879）年、教育令の施行により、学校の設立に分校が設置された。
- ・明治20（1887）年以降、教育の高まりとともに生徒数が増加し、従来のもものでは狭く、校舎建設が盛んになった。これにより、分教場が独立校になっていった。
- ・明治時代の学校の課題は、校舎設備の充実と、就学率や出席率を高めることであった。

### (2) 大正期

- ・学校行事が多彩となり、四国への修学旅行、運動会、学芸会などが始まった。
- ・第1回倉橋島村体育大会が、桂浜において大正6（1917）年に開催された。この体育大会は明治にも開催されているが、桂浜での大会は第1回これだけで、以降2回目からは倉橋小学校で開催された。

### (3) 昭和初期（終戦まで）

- ・昭和2（1927）年、釣土田に組合立小学校が創立、音戸町藤脇尋常小学校と倉橋島村釣土田小学校が廃校になり、明德尋常小学校が開校した。

- ・昭和初期，不況下にもかかわらず，校舎の増改築が進められた。昭和2（1927）年，宇和木小学校の教室増築や，西宇土小学校の埋め立てによる敷地の増設などの記録が残っている。
- ・昭和14（1939）年から，各校に「二宮尊徳」銅像が建てられたが，戦争の激化に伴い，この銅像や門扉など金属類が供出となった。
- ・昭和18（1943）年以降，勤労奉仕作業が増え，児童生徒は農作業を中心に，作業に毎日借り出された。わらび採集やどんぐり拾い，遂に運動場が芋畑になった。

#### 4 戦争と暮らし

##### （1）呉軍港と倉橋

- ・亀ヶ首試射場は，戦時中発射弾の威力などの調査を行っていたが，戦後の「金へん景気」で，この地は，鉄や銅の屑を掘る人でいっぱいになり，東宮殿下記念碑もはぎ取られ，その影もない。
- ・燃料置き場は，倉橋東部に，秘密裡に建設が進められた。農業や漁業に打撃を与えたが，多くの労働者で賑わったこの土地を強制的に買収された農家にとって，戦後返還してもらうため耕作組合ができ，多くの人が運動した。この油タンクも「金へん景気」とともに解体された。
- ・この燃料置き場付近の「砲台山」や，西宇土の山に高射砲が設置されたり，海越や鹿島に探照灯があった。
- ・倉橋島の最南端の，横島の沖を通る軍艦は，その頃の男の子にとって羨望の的であった。倉橋島から，呉や宇品へ通う定期船には，外が見られないような幕が張ってあった。また，島民にスパイが多いとか，山に登って眺めていると，スパイに間違われるなど神経をとがらせていた。

##### （2）戦時下の生活

- ・昭和18（1943）年頃から，学校でも食糧増産に協力すべく「学校農園」なるものがあり，多くはさつま芋を植えた。また，山の頂上まで行って，農作業を行った。
- ・ミカンを作っていた農家は，そのミカンの木を何割か切って，芋や麦を植えるという命令も出ていた。
- ・この頃は，自給自足が歌い文句で，ほとんどを畑に耕し，野草も食べられるものは何でも食べていた。島の東部では，大きな農家のある尾立，鹿島に買い出し，西部では宇和木，重生，須川への買い出しがあった。
- ・島内には，軍艦が擬装されて係留されていたので，攻撃を受け，各地にその傷跡が残っている。尾立の空襲は，呉空襲と同日の，昭和20（1945）年7月2日，寺と数戸の家を焼かれた。この日葬式があり，

火葬場の火が残っていたため、攻撃されたとの話である。

- ・ 駆逐艦が擬装していた本浦、重極付近での爆弾投下や機関銃掃射など、攻撃を受けた話は多く残っている。本浦の駆逐艦「楓」の攻撃の際の爆弾一発が得蔵寺裏に落ちている。また、重極の駆逐艦攻撃では、手前の江ノ浦で農作業をしていた人たちが、米軍機に機関銃で撃たれ、数名の死傷者が出ている。
- ・ 昭和19、20年になると、毎日のように出征兵士の姿がみられ、学校で兵士を送る会を行い、そのまま船着き場まで見送りに行った。室尾の砲台山の兵隊が、室尾小学校の校庭で訓練を行う際には、婦人会が、ふかし芋などの炊き出しに出た。学校には、防空壕が掘られていて、学年で入るところが決まっていた、警報が解けない日は、子どもたちは、ずっと家に帰れなかった。